

アジア神学セミナー

キリスト教と食：アジアから提起する神学的課題

11月29日(金)

植木 献(うえき けん)

明治学院大学教養教育センター准教授

キリスト教学・現代神学

0. アジアにおける食の視点

身体の必要を気遣うアジア的挨拶：ご飯食べた？→日本になぜこの挨拶がないのか？

你吃饭了吗(ニー チー ファン ラ マ：中国語)

밥 먹었어요(パプ モゴッソヨ：韓国語)

Ăn cơm chưa?(アン コム チュア：ベトナム語)

sudah makan ?(スダ マカン：インドネシア語)

กินข้าว หรือยัง(ギン カーオ ルー ヤン：タイ語)

Kumain ka na?(クマイン カ ナ：タガログ語)

アジア的「心身一如」の立場の重要性(湯浅泰雄『身体論：東洋的心身論と現代』講談社学術文庫)

「飯が神」(徐南同『民衆神学の探究』新教出版社、1989年、146頁)

飯が天なのです。

天をひとりで持てぬように、

飯は互いに分け合って食べるもの、

飯が天なのです。

天が星を共に見るように、

飯はみんなで共に食べるもの。

飯が口に入るとき、

天を体内に祭ること、

飯が天なのです。

オー、飯は、

みんなで互いに分け合って食べるもの

(金芝河の詩 同、147-8頁)

「食膳共同体」(安炳茂『民衆神学を語る』新教出版社、1992年、359頁)

みずからをキリストの体であると意識した初期キリスト者たちは、色々の枝分かれがあるとしても、有機的な体になるための最も基本的なことが何かを知っていました。多分みずからそうだったというのが正しいでしょう。それは互いに分かち合って食べることでした。

「食口(シック)」

韓国人は有機的な共同体とともに飯を食うことと、不可分の関係にあると考えています。…日用の糧に喘いでいる者たちの食膳共同体から与えられる喜びと平安は、満腹の者たちには絶対理解できません。イエスの行動において、民衆とともに飲み食いしたという事実が大きな比重を占めています。死を目の前にしてもそうでした。そして、神の国で再会する場をともに食べる座にたとえたイエスの言葉の意味は、多分飢えたことのない人々には永遠に分らないでしょう。ですから、家族を食口(シック)と呼んでいた韓国の人々こそ、イエスを最もよく理解しうる民ではないかと思うくらいです。(同、361-2頁)

食べることの神学的重要性

私たちは今でも、物、すなわち食べること飲むこと、そしてそれを生産する実態である労働する肉体の重要性を神学的に明らかにすべきです。食べることを蔑視する者たちは飽食者のみです。物(食べること)の重要性を認めなければ、聖書の中心は発見できないはずです。(同、363頁)

「神の国は、飲み食いではなく、聖霊によって与えられる義と平和と喜びなのです。」ローマ 14:17

「知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。」コリントー 6:19

「つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。」コリントー 12:13

1) 食と手仕事

東日本大震災とクッキングリトリート

料理は世界との関わりを明確にする

手仕事をテーマに 1950 年代までの食生活回復を目指す

生産の現場から離れる現代人(2008 年世界の過半数が都市居住者に)

2) 食の神学の課題と可能性

食の神学の射程範囲は神学全領域である

農業と原罪(『サピエンス全史』)、工業化と原罪(『食の終焉』)

創造論、神・自然・人間の 3 項での考察

犠牲とキリスト論、聖餐論

人間の変容と聖化の課題 聖霊理解

3) 身体を媒介とした真理への接近

身体の変容からの問題提起(火薬から化学肥料へ、農薬によるミネラル吸収阻害、微生物相の攪乱)(『雑食動物のジレンマ』『土と内臓』『土・牛・微生物』)

食の神学は身体のある方全般に関心を向ける必要あり

アジア神学の可能性と西方神学の再考

「飯は神」→食べ物、大地は公共財で私有できない

心身技法を通じての真理接近(『身体論』)

呼吸と食→無意識の領域にアクセスできる意識的手段

呼吸・食を整えることが心身の調整、高度な一体化(心身一如)に

4) 聖霊は酵母、乳酸菌、ビフィズス菌

聖霊の働く場は大腸と大地 聖霊が働く神殿として整える必要性

聖霊の働き: 多様性と一致、内在かつ外部、正義と平和と喜び、聖化

マイクロバイオームの問題 微生物を媒介にすると「内面への沈潜」と「他者との共存・共同性」が繋がる(『土と内臓』『土・牛・微生物』)

植物の根と動物の腸の働きは相似 腸内微生物相を整える食べ物を作り出せるのは健全な土壌

東方神学における聖霊・神化理解、モルトマンの聖霊論との親和性、課題の共有

→神の国と大地 アジア神学の課題

5)おわりに

参考文献

- 安柄茂『民衆神学を語る』新教出版社、1992 年
久松英二『祈りの心身技法』京都大学学術出版会、2009 年
ユルゲン・モルトマン『いのちの御霊：総体的聖霊論』新教出版社、1994 年
V. ロースキィ『キリスト教東方の神秘思想』勁草書房、1986 年
ゲルハルト・リートケ『生態学的破局とキリスト教』新教出版社、1989 年
David Grumett and Rachel Mueres, *Theology on the Menu: Asceticism, Meat and Christian Diet* (Routledge, 2010)
Angel F. Méndez-Montoya, *The Theology of Food: Eating and the Eucharist* (Wiley-Blackwell, 2012)
Philip Lyndon Reynolds, *Food & the Body: Some Peculiar Questions in High Medieval Theology*, (Brill, 1999)
Norman Wirzba, *Food and Faith: A Theology of Eating* (Cambridge UP, 2011)
- 岡田温司『キリストの身体』中公新書
宮下規久朗『食べる西洋美術史』光文社新書
- レオン・R・カス『飢えたる魂<食の哲学>』法政大学出版局、2002 年
河上睦子『いま、なぜ食の思想か』社会評論社、2015 年
高見敏弘『土とともに生きる：アジア学院とわたし』アジア学院、2007 年
道元『典座教訓・赴粥飯法』講談社学術文庫
福岡正信『わら一本の革命』春秋社、2004 年
ウェンデル・ベリー『ウェンデル・ベリーの環境思想』昭和堂、2008 年
湯浅泰雄『身体論：東洋的心身論と現代』講談社学術文庫
- ジェニファー・コックラル＝キング『シティ・ファーマー』白水社、2014 年
ユヴァル・ノア・ハラリ『サピエンス全史』上・下、河出書房新社、2016 年
マイケル・ポーラン『雑食動物のジレンマ』上・下、東洋経済新報社、2009 年
デイビッド・モントゴメリー、アン・ビクレイ『土と内臓』築地書館、2016 年
デイビッド・モントゴメリー『土・牛・微生物』築地書館、2018 年
ポール・ロバーツ『食の終焉』ダイヤモンド社、2012 年